



山村にある小さな電力会社が地元でつくった電気を住民に売り、その収益を元手に地域活性化や耕作放棄地解消などの課題解決に取り組むプロジェクトが、豊田市で進んでいる。地域で生み出された売電収入を、地域の困りごと解決に役立てるといふ斬新なアイデアだ。

事業主体は二〇一九年六月に設立された企業「三河の山里コミュニティパワー(MYパワー)」。同社の社長早川富博さんは足助病院名誉院長でもあり、約二十三年間地域医療に携わってきた。先端医療へのアクセスが難しい過疎地に危機感を感じ、地域に住む人が互いに見守り合い、助け合いながら生きる仕組みづく

売電収益で地域課題解決へ

くりの必要性を痛感。それが、いざい役を担うべききっかけとな名誉院長と電力会社の社長とった。

パートナーシップで目標を達成しよう

17 パートナシップで目標を達成しよう



MYパワー 豊田



障害のある人たちとシイタケ原木の手入れをする若田さん(右)=豊田市大多賀町で

一六年に「たすけあいプロジェクト」をスタートさせ、若者らが高齢者の通院支援をする「たすけあいカー」などの仕組みをつくった。同年四月に電力小売りが全面自由化されたのを受けて準備を進め、三年後に電力事業を含めた「MYパワー」を立ち上げた。これにより売電収入を得る道が開け、豊田市山間部の住民らに中部電力などからMYパワーへの切り替えを求めている。

プロジェクトにより、耕作放棄地の解消に向けた成果が三河の山里コミュニティパワー 豊田市内の山間地域での電力小売り事業や再生可能エネルギーの普及、高齢化などの課題解決を目的に、団体や個人からおよそ100件の出資を集め、2019年6月に設立。同年10月現在、資本金は990万円。豊田市岩神町の足助病院にオフィスを構える。スタッフは10人。

出始めている。豊田市大多賀町にある十一杉の田んぼは全て耕作放棄地だった。早川さんは、MYパワーの出資者である、名古屋市の障害者支援施設「日本福祉協議機構」に呼び掛けて、障害のある若者らと一緒に田植えや草刈りをした。現在、同機構と協力し、山中で約千二百本のシイタケ原木を栽培する。機構の若田友樹さん(左)は「自然と触れ合いながら汗を流すことで、障害のある人も生き生きしている」と話す。

足助病院や豊田市旭八幡町にある廃校を利用した住民の交流施設「つくらッセル」に太陽光発電を使った電気自動車(充電設備をつくるなど)の再生可能エネルギーの普及も進める。目指す仕組みまでの道りは長い。「お金を外にもらさず、地域内で経済を回す仕組みをつくりたい」とMYパワーの萩原喜之専務。プロジェクトが目指すのは山里における「地域経済循環」の確立だ。

(数下千島) 終わり